夜の進軍らっぱ

小川未明

青空文庫

山の中の村です。雪の深く積もったときは、郵便もなかなかこられないようなところでした。父親一人、息子一人のさびしい暮らしをしていましたが、息子は、戦争がはじまると召集されて、遠く戦地へ出征してお国のために働いていました。

「おじいさん、息子さんのところから、たよりがあったかい。」と、顔を見ると村の人はきいてくれました。

「あ、こないだあった、達者で働いているそうだ。もう、あちらは川の水も凍ったということだ。」

「まあ、達者で、お国のために働いていてくれれば結構なことだ、神さまを拝んで、めでたく凱旋するのを待っていらっしゃい。」と、村人は、老人を元気づけたのです。

「なんの、お国へ捧げた倅だもの、それに今度の戦争は長いというから、無事に帰ってくるとは思っていないが、どうか、りっぱにやってくれればと祈っているのさ。」と、老人は答えました。

おじいさんは、口ではそういっても、夜が明けると、日が暮れるまで、息子の身の上を案じていました。そして、雪が積もって道のついていないときには、郵便が山へ上がれまいと思って、村のおけ屋まで出ていって待つこともありました。おけ屋には、学校へいく子供もあって、もし戦地の息子さんからきた手紙なら、かならずその日の中に届けてやるからというのであるが、おじいさんは、それが待てなかった。ある雪のたくさん降った日のことです。わざわざ村まで下りていって、

「手紙はきていなかったかいのう。」と、きいたのでした。

「いえ、こなかったぞ、くれば、とどけてやるものを。」と、おけ屋のおかみさんは、いいました。

「あまり昨夜雪が降って、昼前は道がなかったから、この家へ置いていったかと思ったので。」と、おじいさんは、笑いました。

春になって雪が解ければ、夏、秋へかけては、町からこの村まで三里ばかりの間をバスが通りました。けれど、この村から、おじいさんの住んでいる山の中までは、一里近く、峠つづきの細い道を歩かなければならぬのでした。山には、幾軒も家がなかったのです。

おけ屋のおかみさんが、いいました。

「おじいさん、町の醤油屋さん知っていなさるだろう。二、三日前あすこへ寄ったら、このごろ毎晩、戦地からラジオの放送があって、あちらのようすが手に取るようにわかるというこったぞ。」

「ほう、戦地のようすがわかるとな。」と、おじいさんは、自分の耳を疑いました。

囲炉裏に火をたいて、子供のたびを乾していたおかみさんは、

「わかるっていうことだ。」と、いいました。

「ほんとうなら、きいてみたいもんだのう。」と、おじいさんは、しょぼしょぼした目を大きく開きました。

ちょうど晴れ間とみえて、日が雪の上を射しました。町へいく道には、人の影がちらほらしています。おじいさんは、山へ帰るかわりに、町の方へ向かって、ぼつぼつ歩いていました。

醤油屋というのは、昔からある店で、この近在の人々を得意としていました。おじいさんも日ごろ知っているので、その家を訪ねたのであります。

「こんにちは。」

「おお、おじいさんか、息子さんのところから便りがありましたか

。」と、店の主人がききました。

どこへいっても、知る人は、かならず息子のことをたずねてくれます。おじいさんは、うれしく思いました。これも、お国のためにつくせばこそ、みんなが、心にかけてくださるのだと、ありがたく感じていました。

「悴よ、おまえのために、私までが鼻が高いぞ。」と、老人は、心の中でいうのでした。

「じつは、悴のいっている戦地から、ラジオでむこうのようすがわかるというので、ぜひききたいと思ってやってきました。」と、おじいさんはいいました。

「おお、そうか、無理のないことだ。」と、主人は、おじいさんを家へ上げて、いろいろもてなしてくれました。

おじいさんは、醤油屋の主人の造った自慢の菊の花をながめたり、かごに飼っているこまどりの声をきいたり、また、たるを洗うてつだいなどをしたりして、夜になるのを待っていました。茶の間には、いつか明るく電燈がついていたのです。

「さあ、おじいさん、ここへいらっしゃい、もうすぐあちらから、きこえてくるから。」と、主人がいったので、おじいさんは、ラジオの前にすわって、耳を傾けていました。

「おじいさん、息子さんの声がきこえるわけではないが、ただあちらのようすがわかるというだけですよ。」と、主人は、あまりおじいさんが、真剣な顔つきをしているので、息子の声でもきくつもりでいるかと思って、いいました。

「はい、それは、知っております。ただあちらのようすだけきけば、満足しますだ。」

このとき、アナウンサーの声が、電波に送られてきたのです。

「こちらは、○○野戦放送局です。いま○○部隊が、○○へ向かって、進軍の準備に忙しいのであります。その状況をおききとりください。」

こういい終わると、ヒ、ヒン！　という軍馬のいななき声がしました。つづいて、ブーン、ブーンと、飛行機のようなうなり音がします。それから、タ、タ、タ、ターというらっぱのひびき、ガタン、ガタン、ゴーという戦車の走る音がしました。

そうかと思うと、兵隊さんたちが、なにか仕事をしながら、うたっている歌の声がきこえてきたのです。

勝ってくるぞと勇ましく、
誓って国を出たからは、
手柄立てずに死なりょうか、
進軍らっぱきくたびに、
まぶたに浮かぶ旗の波……。

おじいさんの目からは、涙が流れていました。「今夜は、泊まっていらっしゃい。」と、主人はしんせつにいってくれたけれど、おじいさんは、戦争にいっている息子のことを思えば、また息子と同じような兵士たちのことを思えば、体じゅうが熱くなって、これしきの寒さがなんだ。暗い道がなんだという気持ちになりました。さいわいにいい月夜だったので、主人にお礼をいって、そこを出ました。

町をはなれると、さすがに、町から村の方へいく人影は見えなかったのです。おじいさんは、独り雪道を月の明かりで、とぼとぼと歩いて帰りました。ものすごいような青みを帯びた月の光です。雪

の野原は、銀のようにかがやいて見えました。そして遠くの森の影は、黒い着物をきた人が、じっとして雪の中に立っているのに似ています。おじいさんは、いましがたラジオできいた、兵隊さんの歌が耳について、思い出されて、熱い涙が、ほろほろと流れてきました。

　ゴウ、ゴウと、音をたて北風が募りはじめました。空を仰げば、月をかすめて、黒い雲が、幾つも連なって、きつねかおおかみの群れが、後から後から駈けていくように、西の方から、東の空に向かって走っていました。そして、東の空の果ては真っ暗になって、星の光すら見えなかったのです。

「また、吹雪になってきた。」と、おじいさんは独り言をして、野原の道を急いでいました。わずかに昼間、人の通った足跡が、雪の面がついているばかりでした。

　たちまち、月の光はかげってしまって、風にまじって、雪がちらちらと降り出しておじいさんのえりもとへ入ったのです。

「とうとう困ったことになったぞ。」

　まだあちらの村へ着かないうちに、まったく目も口も開けられないような吹雪となってしまいました。おじいさんは、一歩も、この吹雪に向かっては歩けなくなりました。

　それでもおじいさんは、ようやくの思いで、村はずれの小さな神社にたどりつきました。そして軒下にちぢこまって、吹雪のやむのを待っていましたが、知らぬ間に疲れが出て、うとうとと眠ってしまったのです。社の境内にあるすぎの木の枝から、ドタ、ドタといって、積もった雪が落ちました。すると粉雪が風に舞って、おじいさんの上へ吹きかかりました。

「あっ、眠ってはいけない、よくこれで凍え死ぬのだ。」

　おじいさんは、眠いのを我慢して、夜明けを待とうと思いました。そして、道がわかるようになったら、帰ろうと考えていました。

　おじいさんは、いくら眠るまいと思っても、またうとうとと眠ってしまったのでした。このとき、がやがやという人の声がして、おじいさんは、ふたたびおどろいて目をさますと、吹雪はやんで、月の光が、明るく雪の世界を照らしていました。

「いまごろ、なんだろうな。」

　顔を上げて、あちらの道を見ると、旗を立て、町の方へいく、出征兵士を見送る人々の群れでした。

「おお、どこか遠い村の人で、停車場へ、兵隊さんを送っていくのだな。」

　おじいさんは、神前の階段から身を起こしました。そして、命を助けてくだされた神さまに向かって、手を合わせて拝んでから、道の方へ、雪の中を泳ぐようにして出ていきました。

「ご苦労さんです。たいそう早いお出かけですのう。」と、おじいさんは、声をかけました。

「はい、一番に乗りますのに、おくれてはたいへんだと思って、早めに出てきました。」と、兵隊さんのお父さんらしい人が、いいました。

「吹雪がやんでしあわせです。悴も出征していますので、私も、お見送りさせてもらいます。」と、おじいさんは、みんなの中へ加わりました。

「あんたは、また、どうしてこんなにお早く。」と、問われたので、おじいさんは、町の醤油屋でラジオを聞いて、帰りにひどい吹雪に

閉(と)じこめられたことを歩(ある)きながら物語(ものがた)ったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス
　　1940（昭和15）年4月
初出：「台湾日日新報　夕刊」
　　1939（昭和14）年3月1日、2日
※表題は底本では、「夜《よる》の進軍《しんぐん》らっぱ」となっています。
※初出時の表題は「夜の進軍喇叭」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年6月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜の進軍らっぱ

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/